龜井勝一郎全集

第三巻

講談社

亀井勝一郎全集　第三巻

昭和四十七年三月二十日　第一刷発行
昭和四十九年二月二十日　第四刷発行

定価　二三〇〇円

著者　亀井勝一郎

発行者　野間省一

発行所　東京都文京区音羽二―一二―二一
株式会社　講談社
郵便番号　一一二
電話　東京〇三(943)一一一一(大代表)
振替　東京三九三〇

印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　大製株式会社

落丁本・乱丁本は
お取り替えいたします。
©亀井髮子　昭和四十七年

Printed in Japan

0395-135039-2253 (1)　(文1)

龜井勝一郎全集　第三巻

編纂

河上徹太郎

中村光夫

丹羽文雄

山本健吉

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第三卷　目次

東洋の愛

牡丹観音――岡本かの子追悼――……一三
或る隠者の運命――武者小路実篤論――……一六
逞しき念仏――倉田百三論――……二六

作家論

序……九九
富岡鉄斎（芸術の悲しさ）……一五〇
夏目漱石（知慧の悲しみ）……一五五
森　鷗外（知慧の悲しみ）……一六六
岡倉天心……一七
魯　迅……八二
火を索むる族長の哀歌（魯迅哀悼）……八八
岡本かの子（「やがて五月に」について）……九〇
川端康成（「花のワルツ」論）……九五
林　房雄（「壮年」）……一〇三
「壮年」について……一〇三
山田清三郎（「耳語懺悔」に寄す）……一〇八
島木健作（「生活の探求」）……一一五
「生活の探求」について……一一五

捨身飼虎

川の妖精……二九

芸術の運命

政治家と芸術家……一四五
文学者の社会的関心について……一五一
英雄の文学……一五五
芸術の殉教者……一六二
現代とキリスト……一六八
文芸時評……一七四
一、文学の道……一七四
二、ハムレットと兵隊……一八一
三、人間再生の文学……一八六
四、新しい事態……一九三
五、高級と低級……二〇〇
わが友の本……二〇六
一、葉山嘉樹「海と山と」……二〇六
二、橋本英吉「欅の芽立」……二〇九
三、外村繁「草筏」……二一三
四、林房雄「獄中記」……二一七

五、前川佐美雄「くれなゐ」……二九

島崎藤村

序章　漂泊の思ひ……二三五
第一章　若き旅人……二三四
一　青年時代……二三四
二　信仰……二三五
三　恋愛……二三九
四　友情……二四二
五　生のあけぼの……二四六
第二章　生々流転……二五九
一　破戒……二五九
二　家……二五二
三　生ひ立ちの記……二五七
第三章　仏蘭西への旅……二六〇
一　海へ……二六〇
二　エトランゼエ……二六四
三　欧洲戦争……二六七
四　帰朝……二七〇
第四章　新生……二七三
一　生の危機……二七三
二　嵐……二七六
三　心の漂泊……二七九
四　告白……二八二
第五章　夜明け前……二八七
一　故郷……二八七
二　旅人……二八九
三　青山半蔵……二九一
四　宣長の説……二九二

五　憂愁と行為……二九五
六　民衆の継子……二九六
七　斎の道……二九九
八　落日……三〇〇
第六章　老いたる旅人……三〇三
一　巡礼……三〇三
二　市隠の家にて……三〇九
三　終焉……三一四
附　記……三一八

文芸評論（昭和十年――十三年）

浪漫主義の意味……三二三
現代の浪漫的思惟……三二七
続・現代の浪漫的思惟……三三〇
浪曼的なるもの……三三九
新年号の各雑誌に就いて（回答）……三三三
浪曼的自我の問題……三三三
六号雑記……三三八
音　楽……三三八
読　書……三三九
弐月も平凡……三六〇
編輯後記（日本浪曼派）……三六三
奴隷なき希臘の国へ……三六三
舟橋聖一君に……三六八
編輯後記（日本浪曼派）……三八〇
私事一つ……三八一
「晩年」　太宰治著……三八二
浪曼派の苦しみ……三八三
一、今日の浪曼派は何を強ひら

れてゐるか……三八三
二、浪曼派の不安はどこにあるか……三八五
三、階級的主観の昂揚を要す……三八六
戒律を索めて……三八八
「少年」について……三九一
文学を志す人のために（回答）……三九二
編輯後記（日本浪曼派）……三九三
私小説についての感想……三九三
青春の書はいかにして成立するか……三九九
文芸時評……四〇六
一、批評の貧困……四〇六
二、「太公望」「渡辺崋山」「鴨長明」……四〇九
三、説話体への疑問……四一三
芸術における影響の問題……四一六
新刊抄……四二一
阪本越郎に……四二一
森山啓に……四二一
徳永直に……四二三
中野重治に……四二三
林房雄に……四二三
芭蕉雑記……四二三
わかりにくさ……四二三
先生……四二四
制作……四二五
風流人……四二五
「も」と「と」……四二六
漂泊……四二七
今年度の作品と新人（回答）……四二八
青春の文学老衰の徴候……四二八
「魂を衡る男」に就いて……四三〇
編輯後記（日本浪曼派）……四三一
文学に於ける新しさ・古さといふ問題……四三一
中野重治論……四三八
科学への欲求……四四一
頽敗と祈禱と科学……四四八
文学賞を与へるとすれば（回答）……四五一
文学者と基督教的精神について……四五三
ゴリキイ追悼の辞……四六一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

島木健作の人と作品……四六八
編輯後記（日本浪曼派）……四七三
印象に残つた作品、評論（回答）……四七三
本年度評論賞を与へるとすれば誰に？
（人とその作品）（回答）……四七三
編輯後記（日本浪曼派）……四七四
美への郷愁……四七五
東洋の希臘人……四八〇
編輯後記（日本浪曼派）……四八四
当面の二つの課題……四八五
文芸時評……四八八
明治の批評家と昭和の批評家……四九五
歴史的精神の衰弱……四九五
批評の発達と大学……四九七
現代作家軽蔑論……四九八
日本的なものの将来……五〇〇
編輯後記（日本浪曼派）……五〇三
異風の求信書……五〇三
編輯後記（日本浪曼派）……五〇四
文化における健康性の恢復……五〇五
編輯後記（日本浪曼派）……五一三
理想の民衆と現実の民衆……五一三
政治と文学……五一三
ジイドの場合……五一五
過渡期の精神……五一六
ユートピア……五一七
日本に於ける世界精神……五一九
ゲエテ研究　ブランデス著　栗原佑訳……五二三
編輯後記（日本浪曼派）……五二六
文学党派の必要……五二七
文化の再生における信仰と科学……五三三
編輯後記（日本浪曼派）……五三九
「春の絵巻」に寄せて……五四〇
編輯後記（日本浪曼派）……五四一
最も印象に残つた作品（回答）……五四二
「古典の親衛隊」に寄せて……五四三
文芸時評……五四六
火野葦平……五四六

解題……五八

東洋の愛

牡丹観音
――岡本かの子追悼――

岡本かの子氏にはじめてお会ひしたのは昨年の秋であつた。それから突然死の通知をうけとるまで、顧みると私の交りはほんの束の間にすぎない。華かな五彩の雲がふいに流れて来て、茫然としてゐる間に早くも通り過ぎて行つたやうな感じがする。私はその刹那をどのやうに解していゝか、確かな言葉を今尚見出すことが出来ぬ。大いなる生命は美しく痛ましく燃えさかりながら西方へ没し去つた。昨年、「やがて五月に」を発表された折、短い批評文を或る雑誌に載せたが、それを本の跋にいれたいといふお手紙を頂いたのが最初である。年も十二月に迫つた頃、「丸の内草話」をかき、ついで二三の短篇にとりかゝるといふ簡単な葉書を貰つた。その一隅に次のやうな歌がしるされてあつた。私にとつてはこれが最後の消息である。

地震(なゐ)やみて　しばし見上ぐる　天上の　月の光は　静かなるかも

私は観音経覚書をかくについて、直接氏の教を乞ふべく屢〻高樹町の御宅を訪ねたことがある。その一日一日の不思議な感銘は生涯忘れることがないであらう。古びた洋室には明治の薫りが残つてゐた。はじめて西欧の貴族文化を享けいれた日の、優雅でロマンチックな香ひのする小部屋である。そこに坐つて、秋雨の音をききながら、大乗のまことの相を語つて下さつた日を想ひ起す。かの子氏は仏教の教義については一言も触れず、ひたすら生命の美しさ激しさ悲しさに就いてのみ述べた。この人をみよ――これが大乗の妙諦である、これ以外にない。――すべての僧形、宗教家の世界に対し決然と訣別した日のことを、自己の体験として話して下さつた。内村鑑三に対する激しい罵言は私の不服とするところであつたが、さういふ言葉の背後には美へのひたぶるな惑溺がみられた。それは信仰の拒絶とはちがふ。氏の観音信仰は小説に身を委ねることによつてはじめて満たされた。観音の華かな化身は唯美の世界でのみ可能であると云はれた。あふるるやうな生命力は、一切の儀礼と僧侶的修養に堪へ難かつたのだ。小説への転身は深く痛切ないのちの奔流であつたらう。すべての言葉から名状し難い身悶えを感じた。それは抑へようとしても抑へきれぬ生命の泉の湧きあがるさまに似てゐた。

「釈尊が美男でなければ私は仏教を愛さなかつたかもしれない。観音様でも美貌でなければ決して私は観音様を肌身に抱いてなんかゐはしない。あれほど深い教は、美貌より包蔵なし得る資格なし。」

かの子氏と対座してゐると、私はいつも一種の鬼気を感じないわけにゆかなかつた。たとへば千年の甲羅を経た大きな金魚のやうにみえる。断髪が両側から額にかぶさつて、そこに輝く鋭い苦しげな瞳をみてゐると、古代の魔術師のやうにもみえる。あきらかに何かの宗祖の姿だ。菩提樹の下に坐りつゞけてゐる老獪で惨忍な神々のひとりである。男でもなければ女でもない。この無気味な雰囲気を氏は決して意識してゐたわけではなからう。それを告げると非常に嫌な顔をされた。私はゐたゝまれないことが屢々あつた。しかし突然、氏の口から軽い冗談や笑ひが洩れはじめると、今度は可憐な童女の姿が現出するのであつた。晩餐の食卓の上で、色々の御馳走をならべながら、どれにしようかと箸をあちこちへつけてみたり、「露営の歌」のレコードをかけながら伏目がちに微笑された時は、真実美しい童女である。私は氏の作品評の中で、叡智にあふれた静かな母性と、奔放で気儘な若い恋人と、この二つのものが氏の内部に住んでゐるとかいた。が、現実に接したとき、それは把捉し難い奇怪な変化の相であつた。無邪気で楽しさうであるけれど、或る暗い運命が氏をとらへてゐたやうに思ふ。それが何であるかはわからない。孤独な生命ほど華かに燃えあがるものだと或る時語つた。「念彼観音力」は切実ないのちの苦悶であつたらう。

「私が巴里にゐた頃、フランス人は私を牡丹とよびましたのよ。」さう云つてかの子さんは笑つた。

東洋を象徴する花があるとすれば、それは牡丹を措いて他にない。私はかの子氏を純粋の日本人といふよりは純粋の東洋人とよびたい。日本や印度や支那などの、最も古典的にして純粋な血が流れ集つて氏の高貴な肉体を形成してゐたのではなからうか。或は印度や支那において既に滅びた血が、この一日本人の肉体に最後の華として咲き誇つたともいへよう。かゝる絢爛たる生命が、西欧を訪れた日をこそ私は詳しく知りたかつた。巴里滞在中のことは断片的にしか伺ひえなかつたが、ともあれ氏は廿世紀の巴里旅行者ではなかつたやうだ。ルイ王朝の貴族のやうに、豪華な浪費を試みながら、真に古典的なフランスを体得したのだ。贅沢が見事な思想になつてゐた。私はかの子氏に接してはじめて贅沢の何ものであるかを知つたのである。たとへば卓上の皿にもられた小魚さへ、氏は栄養価値からではなく精神から喰つたのだ。どこかの深海に住んでゐた小蝦を、美しい歯で噛み砕くことが既に思想の営みであつたのだ。それは古い江戸人に伝統する趣

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com